日本近代における「恋愛輸入説」

――　日本近代における「理想化された恋愛観」は、「キリスト教起源」ではなく、キリスト教の権威を相対化する西洋における動き（「世俗化」）の中で、理想化されることになった「恋愛」の位置づけが輸入されたものである　――

加藤　隆

“La théorie de l'importation d'Amour” dans le Japon moderne

“L’amour idéalisé” au Japon moderne est considéré comme “d'origine chrétienne”, mais, en réalité, il est le résultat de l'importation de l’idée sur l’amour, conçue dans le cadre de la sécularisation en Occident moderne.

Takashi KATO

＊＊＊＊＊

目次

１　「恋愛」は「神聖」
２　西洋とキリスト教
３　「愛」とキリスト教
４　「愛」、近代、「世俗化」

＊＊＊＊＊

１　「恋愛」は「神聖」

日本近代における恋愛について「恋愛輸入説」ないし「恋愛輸入品説」というべき立場がある。明治になってから新しい「恋愛」のあり方が西洋から導入されたとされる見方である。伊藤整の 1958 年の論文「近代日本における「愛」の虚偽」における「我々は「愛」を輸入した」という指摘は、こうした見方のもっとも端的な例だと言えるだろう[1]。

「恋愛輸入説」を支持しようとする極端な立場では、「恋愛」ないしそれに類似した現実は、明治になる前の日本には存在しなかったと主張されているようである。これに対抗す

[1] 伊藤整（1905-69）「近代日本における「愛」の虚偽」『思想』409（1958.7.5）（伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫、1981、p.139-154）p.153。

る立場では、「恋愛」のこうした現実は、明治になる前の日本に存在したということが主張されている[2]。

明治以前にも「恋愛」に対応する現実が日本にも存在したといったことを示して、だから「恋愛輸入説」は誤りだとしてしまうと、明治になって新しい立場が導入された事実が隠れてしまう。

どのような名前で呼ぶかはともかく[3]、広い意味で「恋愛」と呼んでよいような現実が明治以前の日本にも存在したことは、事実である。しかし問題は、「恋愛」が明治以前の日本に存在したかどうかではない。明治以降、「恋愛」や「愛」が（こうした呼称が旗印になったりして）、きわめて高い価値のものであるものとして考えられる雰囲気が、急激に、そして広範に、生じた。これはやはり、西洋からの影響である。この意味ではやはり「輸入された」と考えるべきである。恋愛は、当然のことながら明治以前から存在していたけれども、明治になってあたらしいタイプの「恋愛」が生じて、広範で強力なものとなった。

「恋愛」を価値のきわめて高いものとする雰囲気は、日本の近代文学の中で無数に表明されていると思われる。たとえば、石川達三（1905-85）の『四十八歳の抵抗』（新潮社、1956）という小説の冒頭近くの場面を見てみる[4]。

『経済白書』で「もはや戦後ではない」という言葉が使われて有名になったのが、ちょうど 1956 年である。著者の石川達三自身が、だいたいのところ「四十八歳」である。「ロマンスグレー」という言葉が流行し始めていて、小説の中でもこの言葉が用いられている。「四十八歳」は「年寄り」とされているが、そのような「年寄り」にも「ロマンス」の可能性があるというテーマが、この小説で扱われており、これは執筆当時の時代の雰囲気に乗っかっていると言えると思われる。

主人公の西村耕太郎は、二十何年も保険会社に勤めている。やっと次長になった。駅の「フォーム」で、同じ会社の女事務員である能代（のしろ）雪江に偶然に出会う。雪江は、二十歳くらいの未婚の女性である。

結婚の相手は経済力がある人でなければならないと、雪江が述べる。それにたいして西村が「恋愛は至上ではないのか」と反論する。雪江は、「恋愛をすれば、女

---

[2] こうした議論の様子は、たとえば、小谷野敦『日本恋愛思想史』中公新書、2012、p.4 以下、で簡潔に紹介されている。

[3] 柳父章『翻訳語成立事情』（岩波新書、1982）によれば、「恋愛」という言葉は「愛」や「恋」と異なり、明治維新期に、‘love’や’amour’の訳語として編み出された造語とのことである（「恋愛」の項、p.87-105）。このことは西村敬靖教授の指摘（2015 年 5 月）によって気づいた。西村教授は、「したがって、明治期の「恋愛」の流行には、キリスト教の輸入とはまた別の次元で、こうした翻訳語をありがたがる舶来趣味の影響もあったかもしれません」と指摘してくださった。この「舶来趣味」によって生じる神秘的な吸引力は相当に強いものだと考えるべきと思われる。新しく入ってきた「キリスト教」をありがたがる雰囲気にも、この「舶来趣味」は大きく与っていると考えるべきである。

[4] 石川達三（1905-85）『四十八歳の抵抗』（新潮社、1956）（本文中の引用は、『石川達三集』現代国民文学全集 25、角川書店、1958、から）。

は損」と述べる。これに対して、西村が、恋愛が高い価値のものだという議論をひとしきり述べる。

> 「(‥‥) まじめな美しい恋愛は青春を飾る花じゃないか。僕はもう年寄りだけれど、恋愛の価値は否定しないね。恋愛が至上だとは言わないが、人間は若いうちに一度は恋愛しなくてはいけないものだと思っているよ。恋愛を知らない人間は片輪だ。そうじゃないかね」(p.12)

「恋愛を知らない人間は片輪だ」。人間が人間であるためには、「恋愛」は必要不可欠な条件であるという立場が、はっきり述べられている。

こうした考え方を、日本の近代の最初期にはっきりと述べたものとして有名なのは、北村透谷（1868-94）の言葉である[5]。

> 恋愛は人生の秘鑰（ひやく）なり。恋愛ありて後人世あり。恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ、(....) [6]

「恋愛は人生の秘鑰（ひやく）なり」。この言葉が有名である。1892 年（明治 25 年、透谷 24 歳）の評論「厭世詩家と女性」(『女学雑誌』に掲載）の冒頭の言葉である。「鑰（やく)」は「鍵」のことで、恋愛が人生の鍵である、ということである。

1908 年（明治 41 年）に島崎藤村が読売新聞に連載した『春』という小説で、作中人物の青木が、透谷をモデルにしたとされている。この青木がこの言葉を述べていて、この言葉が有名になったとのことである。

「恋愛」のこの高い価値を指すのに、「神聖」といった語が多用されていたようである。秋山駿の『恋愛の発見』(1987) [7]では、

> 明治二十年代には、この「恋愛は神聖」の声は、一大合唱のようなものだったらしい。(p.28)

とされている。また

> (‥‥) 恋愛は「神聖なものですよ」という西欧的な声に圧迫されて、日本の「恋」

---

[5] 「日本においては、明治時代の北村透谷の思想が恋愛至上主義のはしりである」。(「ウィキペディア」「恋愛至上主義」の項、http://ja.wikipedia.org/wiki/恋愛至上主義（2014.10 確認)）

[6] 『透谷全集』第一巻、岩波書店、1950、p.254。

[7] 秋山駿『恋愛の発見』小沢書店、1987。

を捨て、「恋愛」とは何かを問い、かつ混乱するところから、日本の近代文学は始まっている。（p.27）

この恋愛は神聖ですよという西欧的押し付け（‥‥）（p.27）。

とされている

そしてこの高い価値の「恋愛」は、キリスト教の立場によるものだという理解が強力だったようである。

馬場孤蝶（1869-1940）は、透谷とほぼ同い年である。彼が 26 歳の時、1894（明治 27 年）年に、『文学界』に発表された「みをつくし」という小説がある。この小説の中で「恋愛」とはどのようなものかが、簡潔に説明されている[8]。

恋とは、若き男女の一度は、必ず通らねばかなわぬ浮世の関所なりとか。姦淫。野合と他所（よそ）の恋をば、一（ひと）しなみに下すみ給ふ。アーメンの方様（かたさま）の方（ほう）にも、ラブとやら、聖愛とやら申す者は御座るよし。道理でも、才智でも、此の道ばかりは行かぬものにや。若い男女の堅いのと、秋の空合い、当にならぬ物の一対ぞかし。（p.332）

「恋」には、高い価値がある。「若き男女の一度は、必ず通らねばかなわぬ浮世の関所」である。しかし男女の関係ならば、どんなものでもよいのではない。

ふびむに優しき少女を憐れむ心の、導火となりて、ここに恋の烈火は燃へ上り、洪水の堤を切らんとせしばかりの万想は、今行く可き方を得て、眼界一度に開け、幾年来の睡眠俄かに覚め来れるようにて、激流直下の勢、傍（は）た目には、狂気とも見へそうな程に逆上（のぼ）せて、一も恋、二も恋、只世の中は何事も皆恋ならぬはなしと思ひ、（....）とにかく手に触るるはバイロンの詩集、エルテルが愁（わづらひ）などなり。（p.332）

高い価値の「恋」においては、「一も恋、二も恋」という状態でなければならない。人生や社会の他のあらゆる諸価値に対して、「恋」ははるかに優先されるものでなければならない。

また、この短い議論に、高い価値の「恋」が、キリスト教に関連するらしいことが示唆され（「アーメンの方様（かたさま）の方（ほう）」「聖愛」）、それと並んで、西洋のロマン

[8] 馬場孤蝶「みをつくし」（『女学雑誌・文学界集』明治文学全集 32、筑摩書房、（1973）2013、p.328-346）。

主義の大物であるバイロンとゲーテとの関連が示唆されている。この二つの要素が並んで指摘されていることは、注目すべきである。

巌本善治（いわもと・よしはる）（1863-1942）は、1891 年『女学雑誌』に載った「非恋愛を非とす」という短い文章で、「恋愛は神聖」ということを、端的に述べている[9]。

> （....）然れども此（こ）は恋愛そのものゝ罪にあらず。恋愛は神聖なるもの也。（p.40）

巌本善治のこの文章は、北村透谷が「恋愛は人生の秘鑰（ひやく）なり」と述べた「厭世詩家と女性」という文章の一年前のものである。どちらも『女学雑誌』に掲載された。「人生において恋愛が不可欠」「恋愛は神聖」という方向での文章が続けて掲載され、『女学雑誌』がこのような「恋愛」を広めるためのキャンペーンというべきものを行っていることが感じられる。

「恋愛が神聖」という考え方がいかに強力だったかは、漱石の『こころ』（1914）でも窺われる[10]。

> とにかく恋は罪悪ですよ。よござんすか。そうして神聖なものですよ。（十三）

「恋愛は神聖」という言い方・考え方がひとつの定型、決まり文句のようになってしまっている。この「神聖」という言葉使いに、キリスト教的な雰囲気が濃厚であることは確かである。

「恋愛は神聖」ということを主張する者たちには、実際にキリスト教徒である者もおり、そうでない者もいた。しかし論者や作家本人が「キリスト教徒」であるかどうかは、あまり重要ではない。「キリスト教」は二千年に及ぶ長い歴史をもつ巨大な流れであって、「キリスト教とはいかなるものか」が、「キリスト教徒」であるかどうかによって、「キリスト教を理解している者」「キリスト教を理解していない者」に区分されるようなものではない。「キリスト教徒」であるといった程度のことで、「キリスト教が理解できている」などということにはならない。私（加藤）は、フランスに長くいたが、フランス（特に私が滞在した「アルザス地方」）では、基本的に全員が「キリスト教徒」である。しかし彼らが「キリスト教」を理解しているだろうか。また日本に即して言うならば、「仏教徒ならば仏教が理解できている」ということにならない、ということは議論する必要もないだろう。

一般の者たちは、日本ではもちろん、西洋でも、「キリスト教」についての、雑多で断片

---

[9] 巌本善治「非恋愛を非とす」（『女学雑誌・文学界集』明治文学全集 32、筑摩書房、（1973）2013、p.39-40）。

[10] 夏目漱石（1867-1916）『こころ』（1914、朝日新聞に連載。同年、岩波書店から刊行）。

的な知識や理解の多少の多寡はあっても、「キリスト教とはいかなるものか」が本格的に分かっている者はいないと言ってしまって良いほどである。牧師や神父といった、一応のところ指導的な立場に立っている者の「理解」も、お粗末きわまりない[11]。

「キリスト教」は、明治以来の日本において、どのようであるにしてもとにかく取り組まねばならない重要問題だった。そして「キリスト教」は、高い価値のものという雰囲気になっていた。しかし「キリスト教」については、誰もがお粗末な理解しかできていない。そうした中で、「キリスト教」という用語があり、これにつながるさまざまな事態について、肯定的・否定的な意見が表明されてしまう。

キリスト教が高い価値のものであるということと、「恋愛」が高い価値のものであるということは、「神聖」という用語が示すように、並行した現象であるような雰囲気だった。

「恋愛」ということになり、「一も恋、二も恋」という状態になると、場合によっては、他の活動を顧みなくなって最低限の社会生活ができなくなる、自殺その他の出来事につながるような場合もある。こうしたことがあるために、当時としては、上で引用したテキスト（巌本善治、夏目漱石）に見られるように、「恋愛は罪」とされていたとようである。それでも、恋愛は「神聖」とされ、、価値が高いということになっていた。

これは、西洋文化の影響の結果である。この大枠の理解は適切だと思われる。

しかし、日本で観察していると、「恋愛は神聖」という見方・考え方は、「キリスト教」に密接に結びついている価値観であるとなってしまっている。しかし、これでよいのだろうか。

２　西洋とキリスト教

西洋世界とキリスト教の関係について、しっかりとした理解をもつ必要がある。

ここで問題とする「キリスト教」とは、四世紀以降、西洋世界を支える柱の一つとして採用され、そのようなものとして大規模に機能することになった「キリスト教」である。「教会」と呼ばれる社会制度・社会組織としての「キリスト教」である。「西洋化されたキリスト教」「西洋世界でうまく機能するようなものになったキリスト教」と言うべきような「キリスト教」である。

キリスト教は、最初からこのような「西洋化されたキリスト教」であるしかないものではなかった。さまざまな可能性をはらんだものだった。試行錯誤が行われる。「西洋化されたキリスト教」に帰結する方向への展開は、そうしたさまざまな試行錯誤のうちの一つである。

---

[11] この問題については、加藤隆「「聖書」の「絶対性」は「相対的」である」『ちくま』475、2010.10、p.18-19、という短い文章でいくらか指摘したことがある。

西洋世界は、もともとは、キリスト教の世界ではなかった。ギリシア的なものであり、ローマの勢力がギリシア勢力に代わって支配者になったことを考慮するならば、ギリシア・ローマ的なものだった。

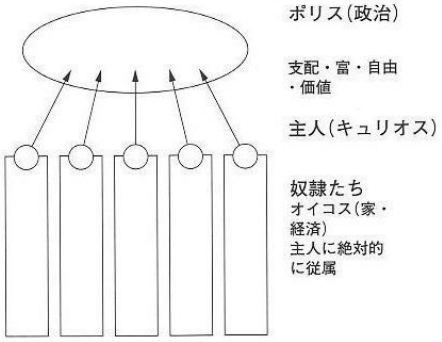
ギリシア・ローマ的でしかなかった西洋世界に、「キリスト教」という柱が、途中で、加えられる。具体的には、ローマ帝国によるキリスト教の国教化の試みがあって、それがきわめて効果的な選択だったことから、キリスト教は、古代末期以降、西洋世界の大きな柱の一つになる。西洋世界はギリシア・ローマ的だった。しかし、なかなか解決しない大きな問題があった。それが、キリスト教の採用によって、その大問題がともあれ解決した。

いくらか詳しい説明としては、拙著『武器としての社会類型論』（講談社現代新書）を見ていただきたい[12]。ここではごく簡単に、最重要の大枠だけを確認する。

西洋世界の文明においてもっとも重要なのは、自由な個人を確保することである。

そこで、人間が上下の二層に分けられる。上層で、自由な個人が成立する。「自由人」であり、「貴族」である。名称は重要でない。実際にどうであるかが重要である。彼らは、富があり、支配者でり、文化（教養）を身につけ、そして「個人」であって自由な者たちである。「主人」という語を用いるならば、彼らにおいて、自分の主人は自分である。

こうした者たちが成立するのは、下層に隷属的な者たちがいて、労働をしているからである。（図「西洋世界の基本構造」）



西洋世界の基本構造

【左】「二重構造」をもっとも簡単に示した。【右】古代ギリシアのポリス国家の時代の様子を想定して、当時の用語をいくらか配した。

こうした上下の二重構造は、古代ギリシアのポリス国家の時代のような小規模な文明だったうちは、それなりに成立・機能していた。西洋世界が大規模になると（決定的な事件は、前４世紀のアレキサンダー大王による征服事業）、思うようには維持できなくなる。広範囲の支配領域についての管理の仕事が生じて、上層の者たちがこの仕事に携わらねばな

[12] 加藤隆『武器としての社会類型論』（講談社現代新書）、講談社、2012

らなくなる。管理の仕事、つまり政治に忙殺されて、自由が制限される。文化（教養）も、思うように追求できなくなる。

後４世紀以降、キリスト教を採用することが、古代西洋社会のこの問題を解決する。

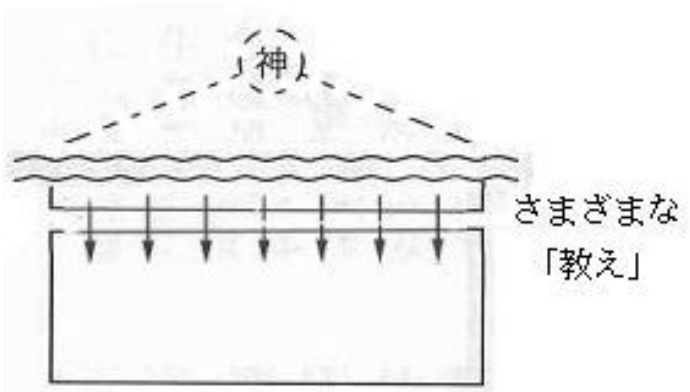
キリスト教では、神とか救いのことが頻繁に問題にされる。

しかし神は動かず、救いは実現しない、とするのが、キリスト教の基本的立場である。救いが実現しないからこそ、救いを望む、ということになる。救いが実現しているならば、救いを望むことはあり得ない。

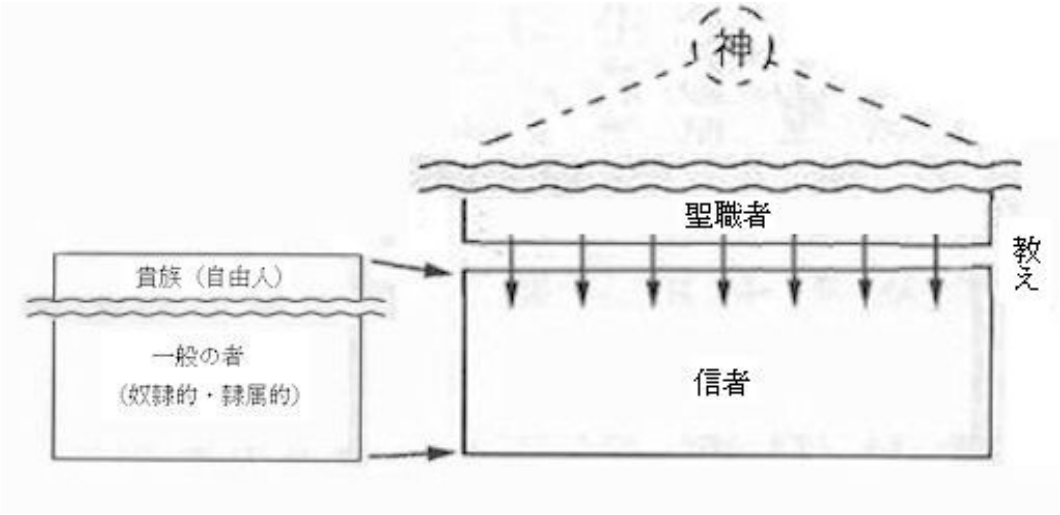
「キリスト教」なるものは、神がほとんど動かず、救いの可能性がほとんど閉ざされている中で、救いを待ち望む者たちが作る社会組織であると考えるべきである。この社会組織は「教会」と呼ばれている。救いがないから、「キリスト教」が生じることになる。

こうした「キリスト教」においても、社会的には、二重構造になっている。神の権威を背景にした聖職者たちが上層にいる。彼らの指導に従順な一般の者たち（信者）が下層にいる。「人による人の支配」がなされていることが、「キリスト教」の大きな特徴である。（図「キリスト教における＜人による人の支配＞」）

二重構造になっているこうした「キリスト教」を、西洋世界が採用する。「貴族／一般の者」の二重構造になっていた従来の西洋世界の全体が、キリスト教の二重構造の下層の部分にあてはめられ、聖職者が上層に位置づけられる。こうして、不完全にしか実現できなかった「自由な個人」が、聖職者の領域で再び十全に実現できるようになる。（図「「貴族／一般の者」の西洋世界の全体が‥‥」）



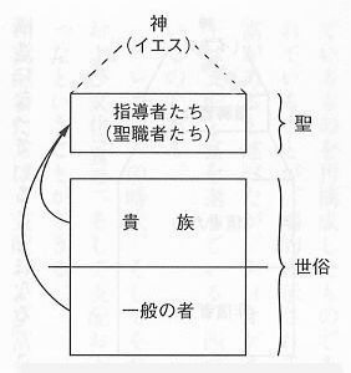
キリスト教における
＜人による人の支配＞



「貴族／一般の者」の西洋世界の全体が、
キリスト教の「聖職者／一般信者」の二重構造の
下層の部分にあてはめられる

「貴族／一般の者」で、世俗の領域（「聖職者」でない領域）にとどまるならば、「貴族」は、「自由な個人」の理想が十分に実現できないままである。また「一般の者」は、隷属的・奴隷的なままである。しかし彼ら（「貴族」「一般の者」）が「聖職者」になるなら、「自由な個人」の理想が実現できる領域に移ることになる。

「聖職者」は、「貴族」「一般の者」から、社会的出自と関係なく、リクルートされる。優秀な者たちが世俗の領域にとどまると、彼らは不満である。場合によっては周囲の者たちを扇動して、騒動を引き起こす。優秀な者たちが「聖職者」になるならば、世俗の領域に残るのは、あまり優秀でない者たち、不満があまりない者たちである。社会秩序を維持しやすい。図「「聖職者」は、「貴族」「一般の者」から」において、「貴族」「一般の者」からの矢印が「聖職者」の領域に結びついていることが重要である。



図「「聖職者」は、「貴族」「一般の者」から」

こうした西洋的制度に適合した「キリスト教」では、「聖職者」が「信者」に与えること

になっている「教え」が重要である。

キリスト教は成立の当初においては、さまざまな可能性をはらんでいた、と述べた。実は、キリスト教の母胎となった古代ユダヤ教が暗中模索・試行錯誤の状態にあって、キリスト教ということになる流れも、古代ユダヤ教におけるさまざまな試みのうちの一つだった。

古代ユダヤ教は、イエスが始めたような方向には動かなかった。絶対的な権威がある「掟」（「律法」）があって、その「掟」との関連でメンバーの全員が生活するといった組織になった。いわゆる「律法主義」である。しかしキリスト教ということになる流れでは、このような方向は、結局のところ採用されなかった。

また、キリスト教では、悟り・救いなどを求めることも、実は最重要ではない。そうしたことは、神が動けば実現することである。神が動かないのに、人間の側だけでどのようにしても、どうにもならないことだからである。

「教え」は、結局のところ、「キリスト教」の枠内での秩序ある社会生活のあり方についての指導である。

注意しなければならないことがある。自由で独立した者に、「教え」が与えられることはない。彼らには「教養」は、あるかもしれない。しかし他者に教えられ、指導されるのでは、その者は自由ではない。教える立場にあるはずの者が、さらに別の者から教えられるのではなければ教えられないなら、その者は本当には教えを与えることができるような者ではない。

キリスト教では、上下二種類の者たちがあると、設定されている。上の者が「教え」を与え、下の者が「教え」を受ける、という活動が特徴的である。まさに「受けるよりは、与える方が幸い」（使徒 20,35、加藤訳）である。「与える者」は、上層に属している[13]。

３　「愛」とキリスト教

[13] Μακάριόν ἐστιν μᾶλλον διδόναι ἢ λαμβάνειν.（使徒 20,35）。「受けるよりは、与える方が幸い」。使徒行伝の物語では、パウロが述べている言葉の中で、イエスの言葉として引用されている表現である。エフェソスの長老たちに、パウロが最後の「教え」を述べるいくらか長い演説の締めくくりのところで、この引用がなされている。ここでのパウロの議論では、経済的な問題が扱われているかのような雰囲気の中で、この言葉が引用されている。パウロが活動を進める中で、パウロ自身の生活のためにも、また彼の活動のためにも、他人からの経済的援助はまったく受けることがなく、すべて自分で稼いだとされているかのように読めてしまい兼ねない。しかし、このテキストをよく読むと、パウロは、そのようなことを述べていないと読めるように、丁寧に議論が進められている。そして、「与える」「受ける」というテーマで、この演説でまず問題になっているのは、パウロが長老たちに与えている（長老たちが受けている）「教え」である。そして長老たちは、今後、「教える」立場に立たねばならない、とされている。したがって、「受けるよりは、与える方が幸い」という言葉で問題になっているのは、「教え」に関する事態である。「教えを与える者」（上層の者）と「教えを受ける者」（信者）がいて、「教えを与える者」（上層の者）が「幸い」と確認されている。

キリスト教では、「愛」はどのように位置づけられているか。やはり聖書を検討するのが、効率が良く、適切なことを指摘し易い。

新約聖書に限っても「愛」については様々なことを述べられている。ここでは、重要で、典型的と思われる三つの個所を見てみる。

「神への愛」と「自己愛・隣人愛」についての「律法」（「旧約聖書」）からの引用が、きわめて重要な「掟」として、三つの福音書（共観福音書）で扱われている（マルコ 12、マタイ 22、ルカ 10）。ここではルカ福音書のテキストを示す。

ルカ 10,27-28

10,27 ὁ δὲ ἀποκριθεὶς εἶπεν· ἀγαπήσεις κύριον τὸν θεόν σου ἐξ ὅλης [τῆς] καρδίας σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ ψυχῇ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ ἰσχύϊ σου καὶ ἐν ὅλῃ τῇ διανοίᾳ σου, καὶ τὸν πλησίον σου ὡς σεαυτόν. 28 εἶπεν δὲ αὐτῷ· ὀρθῶς ἀπεκρίθης· τοῦτο ποίει καὶ ζήσῃ.

（加藤訳）

10,27 彼は答えて、言った。「『あなたの心の全体から、あなたの精神の全体から、あなたの力の全体から、あなたの思いの全体から、あなたの神である主を愛せ、また、あなたの隣人を自分のように愛せ』」。

28 イエスは言った。「あなたは正しく答えた。それを実行しろ。そうすればあなたは生きる」。

まず神への愛が要求されている。人間存在全体をもっての愛が命じられている。人間存在全体で「神を愛する」ならば、その者には、他を愛する余裕はない。つまり自己愛・隣人愛といった、愛の対象が人間である愛は、神を愛することができない者たちの愛である。ここでも、上下二種類の人間があるという設定がなされている。「神を愛する者」と「人間（自己・隣人）を愛する者」である。

「キリスト教」においては神のことが実はあまり問題にされていない、といったようなことを述べたが、肝心なところでは、やはり神こそがもっとも重要である。「神を愛する者」が優れている。「人間を愛する者」は劣っている。「隣人愛」が中心であり、最高のものであるかのように述べる者は、キリスト教に関しては二流以下の者である。

マタイ 5,28-29

5,28 ἐγὼ δὲ λέγω ὑμῖν ὅτι πᾶς ὁ βλέπων γυναῖκα πρὸς τὸ ἐπιθυμῆσαι αὐτὴν ἤδη ἐμοίχευσεν αὐτὴν ἐν τῇ καρδίᾳ αὐτοῦ. 29 εἰ δὲ ὁ ὀφθαλμός σου ὁ δεξιὸς σκανδαλίζει σε, ἔξελε αὐτὸν καὶ βάλε ἀπὸ σοῦ· συμφέρει γάρ σοι ἵνα ἀπόληται

ἓν τῶν μελῶν σου καὶ μὴ ὅλον τὸ σῶμά σου βληθῇ εἰς γέενναν.

（加藤訳）

5,28 しかし、わたしはあなたに言う。彼女を欲して（他人の妻である）女を見る者は、既にその者の心の中で彼女を犯した。

29 もし、あなたの右の目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出して、あなたから捨てろ。なぜなら、あなたの体の一部がなくなっても、あなたの体の全部が地獄に投げ込まれないなら、あなたにとってましである。

マタイ５章に、男女の愛についての厳しい命令が記されている。他人の妻を見て、欲望をもよおしたら、それだけで目をえぐり出さねばならない、とされている。

愛の範囲が法的に限定されていて、それをさらに補強しようとしている。愛は、婚姻関係の枠内だけで営まれるべきである。キリスト教の「教え」の典型的な例になっている。

この規定に関しては、あまりに偽善的な態度が横行しているようなので、ひとこと述べておく。正常な性欲の機能を備えた男性で、「他人の妻を見て欲望をもよおす」ということが一度もない、という者は存在しない、と思われる。この規定に従うならば、「他人の妻を見て欲望をもよおす」ということが生じたら「目をえぐり出す」ということを実行すべきである。人間には通常、二つの目しかないので、男性の目は、二つとも、あっという間になくなってしまうだろう。

しかし、古今東西、この規定に従って目をえぐり出した者は皆無であるようである。たとえそのような者が存在したとしても、ごくごく例外的なことであり、またそのような実践例に続いて多くの者が同様なことを行うといったことは、生じたことがない。

「他人の妻を見て欲望をもよおすということがあっても、実際行動に移らないならば、それでよい」とされているのではない。「他人の妻を見て欲望をもよおしたら、目をえぐり出せ」とされている。正常な性欲の機能を備えた男性は、全員が、この規定との関連で、規定を守らない生活を送っている、ということになる。

この掟自体は、正常な性欲の機能を備えた男性にだけ関わるものだが、一般化して、同様な状況がすべての人に生じていると考えることにする。「他人の妻を見て欲望をもよおす」ということに関する命令だけでなく、似たような「守れない命令」は他にもある。とするならば、すべての人が、「命令を守りきれていない者」になってしまう。すべての者が「ダメ人間」である、ということになってしまう。

ここでは詳しく丁寧な議論を展開する余裕がない。この問題に対処するためには、「教えを与える者」と「教えを受ける者」の二種類が、キリスト教において想定されているという事態と関連づけて考えるべきである。「教え」を「教え」として受け取り、「命令」を「命令」として受け取るのであって、そして「守れない命令」があれば、その者は、「命令を守りきれていない者」「ダメ人間」である。このことを誤魔化そうとするならば、その者は偽

善者である。そして、「教え」の中には、遵守することが到底不可能なものがいくつも含まれているので、「教え」を「教え」として受け取る者たちは、結局のところ全員が「ダメ人間」である。

しかし、「教え」があってもそれを「教え」と受け取るべくもない者にとっては、「守れない命令」があっても、その者が「命令を守りきれていない者」「ダメ人間」と位置づけられることには繋がらない。

1 コリント 13,5

4 Ἡ ἀγάπη (μακροθυμεῖ, χρηστεύεται ἡ ἀγάπη οὐ ζηλοῖ, [ἡ ἀγάπη] οὐ περπερεύεται, οὐ φυσιοῦται,)

5 οὐκ ἀσχημονεῖ, (οὐ ζητεῖ τὰ ἑαυτῆς, οὐ παροξύνεται, οὐ λογίζεται τὸ κακόν,)

（加藤訳）

13,5　（愛は）礼を失することはない。

パウロの手紙から、第一コリント 13 章のいわゆる「愛の讃歌」から、引用する。

「愛」には、永遠と思われるようなところがある。しかし愛は、変化したり、消えたりする。人間に都合よく働くような場合もある。しかし思うようにならない場合も多く、また人間を滅ぼすような場合もある。この「愛の讃歌」の別の個所でパウロは、「愛は決して滅びない」（Ἡ ἀγάπη οὐδέποτε πίπτει. 15,8）と述べている。しかし愛は、消えるときには、はかなく消えてしまうことは、周知のごとくである。

にもかかわらず、愛の素晴らしい面ばかりを強調する「愛の賛歌」には、きわめて大きなアピールの力がある。現在でも、「愛の賛歌」の類は、ポピュラー・ミュージックなどを中心に、大きな現象になっている。

愛は期待させる。しかも人生において、他の面がダメでも、愛はもしかしたら都合よく働くかもしれないと思わせる。他のあらゆる条件がどうであっても、愛が生じて、都合よく働く可能性は、ゼロにはならない。愛には期待できない面が数多くあるにもかかわらず、愛の素晴らしい面ばかりに期待するような場合は、愛以外の可能性がダメだからであり、他の何にも期待できないような、かなり最終的・絶望的な場合だと言うべきかもしれない。

愛のこうした特質を、パウロはうまく利用している。しかしここでも、社会道徳を優先することが忘れられていない。

引用した個所では、愛は「アスケモネオ ἀσχημονέω」ということをしないと、されている。「アスケモネオ」は、語源的には、「スケマでない」「スケマ的でない」ということである。「スケマ σχῆμα」は、ごく基本的な単語で、まずは「形、型、体裁」といった意味である。この語から、英語の schema、仏語の schéma といった語が生じている。そしてここでは、「社会的によいとされる体裁・行動・態度」のことである。「アスケモネオしない」と

は、「社会的によいとされる行動・態度からはずれない」といったことになる。こうした語源に配慮した訳を考えるならば、「愛は、型通りのことしかしない」といった意味だと言えるほどである。

「スケマ」を「礼」と訳すのは、まあまあのところ適切である。したがって、上の引用では、「愛は、礼を失することはない」と訳した。しかし「礼」という語は、肯定的なものである度合いがあまりに大きいので、「愛は、礼を失することはない」と訳してしまうと、この主張が驚くべきものであり、きわめて無理なものであることに気がつかれにくいのではないかと思われる。

「愛は、型通りのことしかしない」という訳ならば、この主張がかなり無理なものであることに気がつき易いかもしれない。パウロによれば、社会的に是認される形における愛、道徳的な愛、からはずれないのが愛、だとされている。

愛がそのようなものでしかないのではないのは、明らかである。「ぼくは、君を愛している」という告白のセリフに、この「愛の定義」を当てはめてみると、この定義がいかに奇妙なものがか浮き彫りになるかと思われる。「ぼくは、君を、型通りの愛で、愛している」「ぼくは、君を、社会的に是認される形における愛、道徳的な愛で、愛している」。これではこの「愛」は、愛ではない、と即座に感じられるだろう。

社会で設定されている枠から愛が逸脱することは、珍しくない。これを、明治の人や漱石の『こころ』の先生は、「愛は罪だ」と言っていた。

しかしパウロは、「罪とされるような愛は、愛ではない」「愛については、、型通りのこと、社会的に受け入れられることだけやっていればよい」と、権威をもって、断定している。パウロは「教え」を与える者である。

しかも、礼にかなった愛は、社会的な側面が不可欠に存在するような愛であって、つまるところ、人間の間の愛である。したがって、これは下層向け、信者向けの「教え」である。

本論文は「愛」に関するものなので、キリスト教の「教え」についても、愛に関する個所ばかり見ることになってしまう。しかしキリスト教は、「教え」において、愛のテーマばかりを扱っているのではない。人間の社会生活を秩序あるものにするために、様々なエレメントを利用している。

別のエレメントとして、ひとつだけ、実例をあげる。「忠実さ」「社会生活において何に（誰に）忠実なのか」というエレメントである。「忠実さ」が問題になると、それが「何に（誰に）忠実なのか」がどうしても問題になる。従順な者たちを作りあげる上で、きわめて有効なエレメントである。ここで「忠実さ」とは、ギリシア語では「πίστις」（ピスティス）である。「奴隷が主人に忠実である」といった態度が、「ピスティス」である。キリスト教においては、「忠実さ」は、やはり「神への忠実さ」のことだと考えられてしまう。また実際、きわめて頻繁に、「神への忠実さ」が強調される。しかし対象が何かを特定しない、

曖昧な「忠実さ」という用例が多い。しかし、既に指摘したように、キリスト教は神が動かないところから成立している。神に忠実であろうとしても、神が動かないのでは、神に忠実になれない。しかし、「忠実さ」が強調される。すると、「指導的な者たち」(「忠実さ」が重要だと主張する者たち)) に、他の者たち（「信者」）が忠実になるということになってしまう。「ピスティス」は、「信じること」と訳してもよいような意味がある。そして「信者」は「信じる者」という意味だが、彼らは、まさに「＜ピスティス＞ということをする者」「忠実な者」「隷属的な者」である。

キリスト教は、人間の社会生活を秩序あるものにするために使える小道具は何でも使う、といった感じである。愛はそうした小道具の一つである。

しかし制御しきれないところがあるのが愛である。少なくとも一部の人々には、愛が強く働く。「型通り」にならない可能性が大きいのが、愛である。

そうした人にとっては、愛に生きることによって自由に生きる可能性が現実になろうとしているところがある。教会が設定した枠組みに嵌りきらない、あるいはそうした枠組みを無視する方向に、進む人々が生じてくる。

西洋の古い時代で、こうしたことが目立った現象になっているのは。やはり「十二世紀ルネサンス」のあたりの「宮廷恋愛」、あるいは中世の騎士道における「貴婦人崇拝」かと思われる。「トゥルバドゥール」たちが活躍したりした。

「最初のトゥルバドゥール troubadour」とされるギョーム公（Guillaume IX, duc d'Aquitaine 1071-1127）について、見てみることにする。

> ギョーム公は快楽を求めた人生を送り、教会からの非難に対しても無頓着であった。同時代の敬虔な作家たちから「神を恐れれぬふとどきな輩」と批判されながらも、多くの愛人を囲っていた[14]。

[15]

[14] アンドレア・ホプキンズ『図説西洋騎士道大全』東洋書林、2005（Andrea Hopkins, *Knights*, Quarto Publishing, 1990）（特に、第二章「ロマンスの勃興」）、引用は、日本語版の p.89-90。
[15] http://fr.wikipedia.org/wiki/Guillaume_IX_de_Poitiers（2014 年 10 月確認）に添えられ

愛を生きる彼の生活態度は、教会から非難されている。愛を自由に生きようとすることは、教会から非難されるべきものである。

彼の詩の一部を示す[16]。

(occitan)	(français)
（....）	（....）
E no m'en tenguatz per yure,	Et ne me tenez pour ivre
S'ieu ma bona dompna am!	Si j'aime ma bonne dame,
Quar senes lieys non puesc viure,	Car sans elle je ne puis vivre,
（....）	（....）

「彼女なしでは、私は生きられない」と歌われている。「一も恋、二も恋」という状態になっている。

中世の世俗的エリートたちが、世俗の領域で愛を生きることが、理想化されている。しかし、こうしたあり方は、下火になる。

『ドン・キホーテ』Miguel de Cervantes, *Don Quijote de la Mancha*, 1605, 1615 は、17 世紀初頭の作品である。騎士道的理想が茶化されていて、理想が賛美されるのではなく、その理想を生きようとする個人の苦渋が中心テーマだと言うことができる。

騎士道的理想が下火になることは、世俗の領域での自由な個人の追及が断念されことを、意味しているのではない。「愛」ではなく、「理性」に、大きな可能性が見えてきたために、「愛」という道具を使うことが下火になったと考えるべきである[17]。

ていた画像。「BnF ms. 12473 fol. 128 - Guillaume IX d'Aquitaine, Domaine public」とされいる。作者は「Inconnu」。

[16] http://fr.wikipedia.org/wiki/Guillaume_IX_de_Poitiers（2014 年 10 月確認）。

[17] 「騎士道的理想」は、19 世紀以降、ふたたび大きな流れになる。『三銃士』などがすぐに思い浮かぶ。しかし、みるからに「騎士」という姿の者だけではなく、超人間的な人物が活躍する物語は、広い意味での「騎士道的理想」を謳歌していると言うことができる。たとえばシャーロック・ホームズは「騎士」的である（たとえば、*The Sign of the Four*, 1890 で、依頼客の Miss Mary Morstan が、Holmes と Watson のことを、two knight-errants to the rescue と位置づける場面がある）。その他、スーパーマンやバットマンなど、広い意味での「騎士道的理想」の謳歌に当てはまる例は枚挙のいとまもない。女性版の「騎士道的理想」も謳歌されている。ただし、次の点に留意すべきである。どこまでも高貴で理想化された女性への想いをもつことが、「騎士道的恋愛」の典型である。しかし、こうした service d'amour のテーマは、近代における広い意味での「騎士道的理想」においても同様な位置づけで登場するとは限らない。*The Sign of the Four* におけるシャーロック・ホームズは、女性の魅力に無関心である。そのためにワトソン博士に"You really are an automaton,--a

私なりに適切かと思われる見方を示しておく。

科学技術が成立・発展し、また文系的分野でもルネサンス・文芸復興ということになって、世俗の領域で、「理性」に広々とした開拓の領域が開けてきた。これが、「愛に生きる」ことが下火になる大きな理由ではないだろうか。

この動きが進んで、18 世紀は「理性の世紀」「啓蒙の時代」ということになる。理系においても文系においても。「研究」の活動が展開されるようになる。この動きには、教会の秩序からの逸脱がはらまれている。しかしこの活動には、やはり知的エリートだけしか夢中になれないところがある。愛の場合のように、人々が簡単に真似することができない。

啓蒙主義（Lumières）のチャンピオンであるヴォルテール（Voltaire, 1694-1778）のものとされる有名な言葉を引用する。

Plus les hommes seront éclairés, et plus ils seront libres.[18]

理性が磨かれれば（éclairés）、人は自由になる、とされている。「教会の教え」は問題にならない。また、理性のこうした動きの目的は、人間が自由になることである。

しかし、たとえば、古代ギリシア語の勉強を始めて、名詞や動詞の変化がたくさん出てくる。それが混乱して、何年たってもモノにならない、というのでは、出だしのところですでに「éclairés」ということにならず、「自由」はほど遠いということになってしまう。

教会の権威が社会において相対化する。こうした動きが「世俗化 Secularization」である。

「世俗化」という用語は、一般化して用いることもできる。しかしまずは、近代西洋世界における動きとして意味のある用語である。そして、社会における権威の問題である。

たとえば、中国文明において「世俗化」は意味がない。文明が成立する当初から、宗教的権威を排除・無視したと言える徹底した立場が確立している。「世俗的」という用語を用いるならば、中国文明は、元から「世俗的」である。また日本文明についても、「世俗化」は意味がないと言うべきである。日本文明も、元から「世俗的」である。しかし中国文明の場合と、タイプが異なっている。日本文明においては、宗教的権威は排除・無視されて

---

calculating-machine!" I cried. "There is something positively inhuman in you at times." と言われてしまっている。男性のスーパーマン的ヒーローがいると、それに匹敵するような女性のヒーローも活躍するという設定が、特にアメリカのドラマや映画に典型的だと思われるが、このような女性像は、伝統的な service d'amour の対象にすんなりと当てはまらない。

18 この言葉は、このままの形では、ヴォルテールの著作に存在しないようである。ヴォルテールの言葉であるとコンドルセが述べたのが、起源であるらしい。Condorcet attribue cette citation à Voltaire, précisant qu'elle est issue de *Questions sur les miracles* ; cependant, elle ne se retrouve pas dans cette œuvre. « Vie de Voltaire », Condorcet (1789), dans Œuvres complètes de M. de Voltaire, Voltaire, éd. Sanson et compagnie, 1792, t. 100, p. 181.（http://fr.wikiquote.org/wiki/Voltaire（2014 年 10 月確認））

いないが、社会的に本格的意味がない領域（「忍」の領域）に追いやられてしまっている[19]。

西洋世界近代においては、キリスト教ないし教会の権威に、まず理性が広範で強力な対立の根拠になる。

騎士（貴族）の一部が、愛の自由な実践を試みるくらいでは、社会全体を覆う教会の権威を揺り動かすようなインパクトがない。また、愛の動きがバイオレンスの動きとかなり並行したものであることを考えると、十字軍のような大きな事件は、「世俗化」の方向に向かいかねない動きを教会がうまく処理しようとした出来事だと考えることができるかもしれない。いずれにしても、一部のエリートだけに関わる愛やバイオレンスだけでは、本格的な「世俗化」は生じない。

しかし理性の独立は、科学技術の進歩・発達が社会にもたらす大きな成果を背景にして、巨大な動きになった。理性は、すべてについて自由に吟味しようとする。教会に考えてもらうのでなく、自分で考える。「教会に考えてもらう」とは、教会が与える「教え」に従順に従うということである。これが「信仰」だった。

19 世紀が近づくと、「世俗化」の動きが理性による論争において問題にされるだけでなく、いよいよ社会全体の大きな動きになってくる。

4　「愛」、近代、「世俗化」

19 世紀が近づく時期になると、「世俗化」の動きに民衆が加わるようになる。理性による研究や論争は、彼らの手に余る[20]。しかし教会の道徳的教えには従いたくない。

人々の文化的レベルが向上したきたことも、考慮に入れねばならない。人々は、字が読めるくらいにはなる。しかし、語彙は日常生活のものである。難しい本は読めない。再び、ヴォルテールの言葉に助けてもらうならば、

> Jamais vingt volumes in-folio ne feront de révolution; ce sont les petits livres portatifs à trente sous qui sont à craindre.[21]
>
> （加藤訳）
>
> 20 巻の in-folio の本が革命を引き起こすことはない、30 スーの携帯できる小型本が、恐るべきである。

---

[19] 加藤隆『武器としての社会類型論』（講談社現代新書）、講談社、2012, ad loc.

[20] ただし、自然科学の研究者は、理性による自由な吟味を行う大規模な集団になっている。科学的研究は自然を対象とする面においてきわめて有効であり、目覚ましい進歩が実現し、技術として社会を大幅に豊かにしてきている。

[21] « Lettre XII à M. d'Alembert » (5 avril 1765), dans *Œuvres complètes de M. de Voltaire*, Voltaire, éd. Sanson et compagnie, 1792, t. 98, p. 23.

「in-folio」とは、本の型の名前で、必ずしも大きさを示す名称ではないが、一頁の大きさがだいたいのところ今の A3 くらい、分厚くて、一巻が 10kg くらいになるのが普通だったという[22]。スー（sous）は、旧制度の時代のお金の単位。昔のお金の価値をうまく伝えるのは難しいが、日雇い労働の者の一日の賃金が、だいたい 20 から 30 スーだったようである[23]。

一般の人々は、小説をたくさん読む、ということになった。

＊＊＊＊＊

Georges Croegaert (1848-1923)
Heures de loisir（部分）
Collection particulière

この絵は、Roger Chartier, *Le livre en revolutions* , 1997, p.120 に示されていて、気づいた。Georges Croegaert は、ベルギー出身。パリで過ごすことが多かった。Chartier が添えている短いコメントでは、次のようなことが指摘されている。「このブルジョアの女性が読んでいるのは、仮綴じの小説本。床に同様の本の読みかけが置かれている。左の本棚には folio 版の本が整然と並べられているが、これらはほどんど読まれていないだろう」。

彼女は、小説を読み散らして、時間を過ごしている。難しい本には手が出ない。

＊＊＊＊＊

小説には、自分にもこんな生活ができるかもしれない、ということが描かれている。人はやはり、より良い生活がしたい。難しい存在論的な思索の様子や、研究の地味なプロセスなどは、理解が及ばない。理性を道具にしたのでは、より良い生活がどのようなものかが了解できない。そこで愛でもって実現するより良い生活が描かれることになる。これなら、一般の人々も容易にアクセスできる。人々は、愛の力の可能性に目覚めることになる。

キリスト教は、下層に属する者たちについては、神という高い価値との関連で愛をコントロールし、社会的従順・秩序を実現しようとしていた。これは、西洋世界の本来の理想である自由な個人になり得ない状況にあっても、一般の人々をおとなしく従順な状態に維

[22] http://fr.wikipedia.org/wiki/In-folio（2014 年 10 月確認）。
[23] http://femmedeslumieres.canalblog.com/archives/2014/02/06/29135511.html（2014 年 10 月確認）。

持するためにきわめて有効だった。

本格的な「世俗化」の動きが生じて、教会の権威が相対化される。それと並行して、自由な個人の理想の実現を目指そうとする動き――長い間抑えられてきた動き――が表面化してくる。愛を生きようとすることは、世俗の領域にとどまって、この高い価値を実現できる手段であるように思われる。そのような手段として、大きな魅力がある。

従来の教会的価値のシステムと、世俗的な領域で愛が実現する価値を対比させた作品は、無数にあると思われる。ここではモーパッサンの *Clair de lune*, 1883 という短編の末尾に注目する[24]。

（短編 *Clair de lune* の末尾）

> Et il reculait devant le couple embrassé qui marchait toujours. C'était sa nièce pourtant; mais il se demandait maintenant s'il n'allait pas désobéir à Dieu. Et Dieu ne permet-il point l'amour, puisqu'il l'entoure visiblement d'une splendeur pareille?
> Et il s'enfuit, éperdu, presque honteux, comme s'il eût pénétré dans un temple où il n'avait pas le droit d'entrer.

一人の神父がいる。この神父は特に、女性を軽蔑している。ところが、夜、月の光の中で、若い男女がデートしている場面を見てしまう。それがきわめて美しい。

教会の枠外に、素晴らしいものが実現している。神父は狼狽する。そしてモーパッサンは、彼は「自分には入る権利のない、一つの神殿に入ってしまったようだ」と指摘して短編を締めくくっている。

従来のキリスト教の枠組が退けられている。しかし注目しなければならないのは、キリスト教の枠外の素晴らしさを表現するのに、キリスト教的な用語が用いられている点である。愛が実現している領域が「一つの神殿」だとされている。これは「愛は神聖」だという主張と同然だと言うことができる。

本論文での考察にとってぴったりのテーマが検討されていると思われるタイトルの論文がある。“Le romantisme et la déchristinisation de l'Europe”である[25]。その論文で Schenk という研究者は、ロマン主義の時代に、信仰と理性、超自然と自然の区別が消えてしまう傾向がある、と述べている。この論文における指摘に助けられながら、敷衍を含めて議論を進めてみることにする。

---

[24] Guy de Maupassant (1850-93), *Clair de lune*, 1883 という短編集に収められている。

[25] H. G. Schenk, “Le romantisme et la déchristinisation de l'Europe”, *Romantisme et Religion, Colloque à Metz*, 1980, Puf, p.113-116.

> (...) la ligne de démarcation entre la foi et la raison, entre le surnaturel et le naturel, que des Européens tels qu'Albert le Grand et St Thomas d'Aquin, Duns Scottus et Occam, Pomponazzi, Pascal et Kant avaient établie au prix de tant d'efforts, tendait maintennat, dans la période romantique, à s'effacer. (p.113)

神や信仰ないし確信のテーマが、ロマン主義の時代に消えてしまうのではない。キリスト教の制度（教会）の社会における権威が大きく相対化されるというのでありながら、従来のキリスト教で重要だったテーマは、「何となく」重視され続ける。

判断の方向が、「何となく」としか言いようのない雰囲気でなされていくのが、大きな特徴である。高い価値がありそうなテーマに、魂の状態、感情のあり方を根拠にして取り組もうとするのが、ロマン主義の特徴である。魂の状態、感情のあり方が重要であるなら、魂を持つ人間、感情を体験する人間、がまずなければならない。人間がいつまでも残る。神がテーマであっても、神が中心でなく、人間が中心であり続けるしかない。

人間が中心であるならば、人間の通常の理解を超えるものは、いつまでたってもあいまいで神秘的である。「高い価値がありそうだが、いつまでたっても、曖昧であり、神秘的である」。このようであることが、魂や感情の存続を保証している。人間が人間であり続けることを保証している。人間が「世俗的」であるということは、人間が人間であるしかないことにしがみつくことだ、と言えるかと思われる。高い価値からの「いざない」に応えようとする。それは喜びである。しかし人間であることを捨てようとしないので、高い価値からの「いざない」が、いつまでも「いざない」でしかない。「いざない」があって、それに応えようとすることは喜びだが、「いざない」がいつまでも「いざない」でしかないのは苦しみでもある。しかし、その苦しみが、ロマン的魂にとっては喜びでもある。Schenk の言い方ならば、「曖昧な enthousiasme を求めて生きる」ということになる。

これはやはり、理解する力が弱く、しかし高い価値を放棄したくない、という立場があるから生じてくる状態である。

こうした中で、手近に現実であることの可能性が大きいと思われる「愛」が、とびぬけて重宝される。

魂の状態、感情のあり方にかなり直接に訴えかけると思われる「愛」が、高い価値をもつということになる。

たとえば「自由恋愛」がよい、ということになる。離婚を認めさせようとして、キリスト教的に制度化された結婚を相対化させようとする動きが生じる。結婚は社会制度であって、「自由恋愛」に対しては桎梏になると基本的には考えられる。しかし「自由恋愛」を実現するなら、社会制度の外側に自由な領域を確保することがまずは考えられるべきだと思われる。社会制度の圧力を緩めることに注目すると、恋愛を自由に生きるのではなく、「自由恋愛」を社会的に認めさせることに終わってしまう。「自由恋愛」への憧れが社会的に表現されるだけに終わってしまう。「自由恋愛」を称揚するなら、高い価値がありそうな「恋

愛」の味方になれる。しかし「自由恋愛」を社会的に認めさせるだけで、「自由恋愛」を実際に生きることについては、かなり消極的で、恋愛能力の欠如が疑われるほどである。ギターを弾いてはいけないという社会的禁止があって、その禁止を解除して、ギターを手にすることが社会的にはできるようになるのだが、ギターをうまく弾くことができない、というたとえが有効かもしれない。しかし、こうした中途半端なアプローチが、手近にあって取り組み易い。

「Peuple」（民、民衆、人民、等々）という、曖昧で、でも誰でも参加し加担できそうな集団が、とにかくも高い価値があるとされるようになる。

「音楽」なるものが、とにかく、有無をいわさずに価値が高いとされる。音楽はかなり手軽に現前させることができる。強い魅力があることは明白である。しかし「理解」しきれない部分が大きい。魅力があって曖昧であり、「ロマン的魂」の要求にぴったりである。

「ロマン的魂」が熱情をもって求めているのは、神を感じることである。「ロマン的宗教性」では、知性ではなく、魂の状態、感情が重要であることになる。感じるだけでは、神との本格的なつながりは生じない。したがって、神との関連では、いつまでたっても基本的に不満足の状態にとどまることになる。「宗教性」が人間中心的になっていて、神中心ではないからである[26]。それでも「ロマン的魂」は、人間中心の立場を放棄しない。曖昧で神秘的なものに身を寄せるのは、喜びがあるからである。しかし「不満足の状態」からの苦しみが伴う。「憂鬱」などと呼ばれる状態である。「理解」する力が弱く、しかし「高い価値」を放棄したくないから、こうしたことが生じることになる。

「世俗化」は「キリスト教」の単純な否定ではない。「キリスト教の制度（教会）」は敬遠するが、「神」も含めて、さまざまな要素との関係の構造を、「キリスト教の制度（教会）」の枠外で保持しようとする態度である。その際に、「キリスト教」のさまざまな用語を、世俗的にも用いるために、観察者に混乱が生じることなる。

ロマン主義は、19 世紀の直前あたりから盛り上がって、19 世紀前半がピークだと言えると思われる。

日本の明治時代は、19 世紀後半である。

---

[26] この機会に一言述べさせていただきたい。「神」の問題は、当然のことながら「宗教」の問題だとされる雰囲気が、近代においてきわめて濃厚である。それなりの知識人でも、このレベルの理解から脱却できていない場合がほとんどである。「宗教」は、神（神々）の権威を背景にして、人集めをする社会的行為である。「人間」を捨てないで、神に関わろうとするという点で、ここで議論している「ロマン的魂」の立場に重なるものである。「宗教」のアプローチでは「神」の問題に本格的に取り組むことはできない。「宗教学」は「神学」ではない。私個人の体験だが、私が神学を勉強したフランスのストラスブール大学では、以前は博士号が「宗教学博士」だったらしい。しかし私が博士論文を提出した時（1990 年代）には、与えられる称号は「神学博士」になっていた。どのような議論があって名称の変更がなされたのか、残念ながら詳しく知らないが、この点に関しては適切な見識が示されていて、頼もしい。

西洋においては脱キリスト教化、世俗化、がかなり進んで、そこで生じたところの恋愛を高く評価する見方が、いきなり日本に入ってきた。

恋愛の高い評価には、キリスト教的な用語がいろいろと用いられている。

たとえば「愛は神聖だ」という表現である。

これは、私が比較的よくわかるフランス語なら「L'amour est sacré」だと思われる。

「sacré」は、日本語に訳せば「神聖」である。キリスト教的な用語だと言えば、その通りである。しかしフランス語で「L'amour est sacré」と言われて、それがキリスト教的な価値観の枠内で「神聖」だという意味と解する人は、フランス語を母国語とする者なら、小学生でさえもあり得ないと思われる。この場合の「sacré」は、あえて言うならば「非難のあり得ないような高い価値のもの、どうしようもないもの」といったような意味である。たとえば「バカンス」は「サクレ」である。しかし日本語で「愛は神聖だ」と言うと、どうしようもなくキリスト教的雰囲気が濃厚になる。抹香くさい、ということになる。

キリスト教についての理解が浅く、しかしキリスト教をとにかくも高い価値のものとしなければならない雰囲気が生じて、そこでキリスト教用語が用いられると、西洋では世俗的用法のものであるのに、日本ではそのまま「キリスト教用語」として理解されなければならないことになった、と理解すべきと思われる。

こうして、西洋から来た恋愛、高い評価の恋愛は、キリスト教のものだという理解が生じてしまった。

もう一点、指摘しておくべきである。

明治以降に日本に入ってきた「キリスト教」は、特にアメリカ人宣教師・牧師などによるピューリタンのものが中心的だった。ピューリタンのキリスト教は、制度的ではあまりなく、民衆レベルの人々が理解できる程度の確信――それを彼らは「信仰」と呼んでいる――がきわめて重視されている。人々がそれぞれ自由に、自分の確信のあり方を選べる雰囲気になっている。したがって、たいへん自由であるような印象を与えてしまう。しかし理解の力が弱いので、身の回りの小さな生活の要素に彼らの確信に合わせて取り組んで、そうした取り組みを高い価値のものだとする、といったことが生じてしまう。

ピューリタンが大きな勢力になることは、制度的な教会の立場から言うならば、キリスト教内部での世俗化の動きだ、と言えてしまいそうなくらいである。

「愛」は、曖昧で神秘的である。しかし、手近にありそうなところが多分にある。そこで、とにかく「愛」を高く評価するということになる大きな余地がある。

パウロは、愛を、小道具のひとつとして使おうとした。これは、愛を高く評価しやすいという、愛についての一般の人々の傾向を、うまく使おうとした例だと思われる。

ピューリタンの宣教師・牧師が、愛は素晴らしいと言う。西洋の最新のロマン主義的な大家たちも、愛は素晴らしいと言う。どちらも西洋から入ってきた。だから、西洋起源の「愛」は、キリスト教的なものだということになってしまう。

こうした立場が端的に表明されているのは、伊藤整（1905-69）の「近代日本における「愛」の虚像」『思想』409（1958.7.5）（伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』岩波文庫、1981、p.139-154）ではないかと思われる。

> 我々は「愛」を輸入した。（p.153）

明治以降の新しいタイプの愛は、西洋起源だと思われる。これは適切である。ところが次のように述べられている。

> 明治以来、我々が取り入れた西洋文学の恋愛の思想は、このようなキリスト教の宗教生活の中でのみ実践性があるものである。（p.143）

ここでの「このようなキリスト教の宗教生活」とは、伊藤整によれば、信仰、祈り、懺悔などで、常に立ち直ろうとする態度のことである。

これは誤りである。「キリスト教の宗教生活の中で」ではなく、「キリスト教的な世俗化された宗教的雰囲気の生活の中で」とでも言えば、ぎりぎりのところで適切かもしれない。

伊藤整が言うところの「キリスト教の宗教生活」なるものについても、考えておくのが有意義かと思われる。男女の愛の関係には、さまざまな問題が生じる。それを乗り越えるためには、信仰、祈り、懺悔がある、と、伊藤整は言っている。そんなことは、西洋世界の枠組みでも、基本的にありえないことである。たとえそれに似たような場面があっても、そこで問題になっているのは、魂の状態のことであって、キリスト教的なものではなく、ロマン主義的なものである。

「神聖な愛」がある、それは「西洋から輸入」された。だからこの愛は、「キリスト教の愛」である。これは間違いである。このような間違った認識が、日本では根強いものとして生じてしまった。

「神聖な愛」がある、それは「西洋から輸入」された。ただしこの愛は、「キリスト教の道徳から解放された愛」「世俗化された状況の中で高い価値のものとされた愛」である。本来の「キリスト教の愛」（「愛」（人間の間の愛））は道徳的徳目の一つに過ぎない、と認識すべきである。「神聖な愛」という表現の「神聖な」は、キリスト教用語ではなく、「世俗化されえた状況の中で利用されている＜（元は）キリスト教用語＞だった表現」である。

誤解を避けるために、確認する。

愛が、すべてを解決するような、オールマイティの手段であるように考えられているのは、近代の偏見で、キリスト教の世俗化の中で生じた偏見である。

愛にはすばらしいところがあるのは、確かである。しかし過大評価は誤りである。

しかし、「愛」が異様に重視されている。このためにさまざまな弊害が生じていると思われる。男女関係については特に顕著である。生じるかもしれない弊害のことはあまり考えず、愛が重要だからというので、愛を重視するためのさまざまな工夫がなされてきた。「愛の解放」などと言われた。

ところが男女が自由に恋愛をし、自由に愛を楽しむことができるようになったかというと、そうではない。

ふたを開けてみると、恋愛ができない人がほとんどだということが露呈していると思われる。

誰もが、百メートルを十秒で走れるのではない。恋愛ができる人の割合は、百メートルを十秒で走れる人よりは多いかと思われる。

しかし、たとえば、泳げる人と泳げない人がいる。恋愛ができない人の割合は、泳げない人より多いのではないだろうか[27]。

チャーリー・ブラウンや、寅さんみたいな人がいっぱいである。寅さんについて妹のさくらさんが言っているセリフに、「お兄ちゃんは、気が弱いから」というのがあった[28]。一方で愛を求めているのだが、他方で愛が怖いのある。

恋愛だけが男女関係ではない。ところが恋愛がなくては、男女関係があり得ないような雰囲気になってしまっている。その結果、三十代、四十代、あるいはそれ以上になっても、（高く評価され過ぎている）愛を求め、愛のパートナーを求めてさまようばかりの「愛の迷い子」がいっぱいだというのが現状ではないだろうか。「恋愛」を高く評価し過ぎていることが、大きな原因の一つだと思われる。

（本稿は、2014 年 10 月 11 日（土）日本比較文学会東京支部第 52 回東京大会（会場：二松学舎大学九段キャンパス３号館Ｃ室２）で行った発表の原稿に加筆訂正したものである。）

---

27 「百メートルを十秒」「泳げる人と泳げない人」の比喩は、発表の際に、咄嗟に述べたものである。統計などの調査の結果を踏まえた主張ではない。しかし、理解を助ける効果が大きいように思われたので、削除しないで記しておく。

28『男はつらいよ　寅次郎あじさいの恋』1982 年公開。